

企業行動研究部会議事録（第 259 回）

日 時： 平成 30 年 3 月 12 日(月) 18:00-20:00

場 所： 中央大学駿河台記念館 3 階 350 号室

出席者： （10 名 勝田、河口、木下、西藤、佐久間、櫻井、佐藤、古山、宮澤、銀山、敬称略）

1. 連絡事項

勝田部会長より開会が宣せられ、本日のテーマに関して資料等について説明があった。

また、新規にオブザーバーとして佐久間部会員の知人銀山氏（佐久間部会員の後輩とのこと）が紹介され、今後入会を検討頂けるとのことで自己紹介が行われた。併せて当日の参加者全員の自己紹介も行われた。今回は少人数であったが、改めて全員の自己紹介を拝聴し有益であった。

2. 第 1 テーマ：「経営倫理学会の根本問題」

古山部会員より表題のテーマについて事前に配布された資料に基き報告が行われた。

<報告骨子>

2017 年 11 月 18 日開催の研究交流例会において、一橋大学大学院商学研究科の田中一弘教授による「良心による企業統治」と「コーポレート・ガバナンスによる企業統治」を対比させる内容の講演会が行われた。概略は、本学会・学会報 No.74 第 77 号（2017 年 12 月 4 日）に報告されている。

参考文献としてアンドレ・コント＝スポンヴィル著・小須田健訳『資本主義に徳はあるか』（原題：Andre Comte-Sponville *Le Capitalism Est-Il Moral* 2004 Paris）を挙げられた。本書は経営倫理学には否定的な立場であり、そのような学問の存立基盤それ自体を疑問視する見解が述べられていた。

その理由として、「道徳」ないし「倫理」は人間の「義務」に関わっており、「企業経営」は「利害」と結びついた行為であるから、「倫理」と「経営」を結びつけて、学問の名称とすることは、一種の概念矛盾であると論じている。（中略）

しかし天文学が「学問」であることは、否定すべくもない。経営倫理学にも同様なことが言えるのではないか。（論の背景は本文参照）

との論をご紹介しようとしたところ、2010 年峰内氏が既に取り上げられていたことが分かり感心した次第である。

SBE の活動目的と JABES の活動目的ネーミングについても言及された。

<意見交換>

- ・ 峰内氏の専門分野は何か？ → 哲学と聞く
- ・ 日本人は「学」と「道」をつけたがる。例えば相撲道も！
- ・ 「学」というものを付けるからおかしくなる。
- ・ 慣習的に〇〇学会とつけるので、紛らわしくなるのか？
- ・ 経営における倫理を学習するという表現の方がしっくりくるではないか。
- ・ 英語名の JABES の最後には study がついていてこの方が、筋が通ったのかもしれないが変更したことで分かりにくくなったともいえるのではないか。
- ・ 応用倫理学というものが存在するようになった元はバイオエシックスであり、治療のために行って良いこととそうではないことを明示した。
- ・ ギリシャ神話の世界には医学の神も存在する。

- ・ギリシャの世界で言えばソクラテスだが、日本の古い社会にそのようなものがなかったのか。心の根と書いた、心根という言葉があった。昔の剣豪はこの心根を重要視した。倫理とは別の話とは理解するが。言葉というのは面白い。
- ・倫理という言葉は西周の造語と言われているが、どこからそのように意味づけたかという、倫という文字は、ヒトに冊（短冊）すなわち人の集まりを意味し、人が集まったところには必ずコトワリがあるというところから倫理という言葉を作ったと言われている。
- ・漢字の字海というものから見ると王様のみちで倫理の倫は大理石を切り出す時にタガを入れて割るとまっすぐに割れるところから来ているという説もある。
- ・中国の人と話をすると倫理と論理が混濁することがある。これは中国語に元からあった論理に対し倫理は日本からの逆輸入となっているから。漢字としては倫理というものが現存し使用されている。
- ・倫理における原則は一つしかなく、それは嘘をついてはいけないということ。不祥事はすべて嘘からの帰結と言える。利益を捻出しました、や社員を鍛えている、ということも嘘の裏返し。
- ・カントにどうして嘘をついてはいけないかと聞くと、それは全員が行うと真理がなくなるからと答える。すなわち全の人が行うとダメなことをやらないことである。
- ・峰内資料の中に、企業の行為と倫理は無縁というのがある。
- ・スポンビルは少々、あいまいさを許さないと感じる。
- ・CSV というのはどうなのか？という見方がある。CSR と同義ではないと思う。
- ・CSV は我々の理解する CSR とは異質である。比較の対象と考えない方が良い。
- ・渋沢によれば、利益は垢のようなものであると言っている。経済活動の中で出てくるもの。伊那食品の塚越社長も利益はウンチのようなものと通じるところがある。
- ・ガバナンスを企業統治と訳したことに問題がある。本来ガバナンス路は襟を正すということである。
- ・和辻哲郎の書籍には倫理学その他の理解を促進する良い教科書であると思う。
- ・米国で経営倫理は、応用倫理学の一部として理解されており応用倫理学の第一はバイオエシックスである。
- ・動物愛に倫理の原点を求める考えがあるが、これは本能であって、倫理とは言えない。

以下略

3. 第2テーマ：「新年度の部会運営について」

勝田部会長

今後の部会運営、研究テーマについて意見交換が促され、各自意見を述べた。

<意見交換>

- ・BERC での課題意識は如何か
- ・BERC としても現在の課題、将来の課題について検討中であるが、現場感覚としてのそれと経営層のそれについてまだ若干の齟齬を感じている。例えば研究会についての関心度の投票状況を見ると SDGs や ESG 投資との関連テーマには票が集まる傾向にあるが、AI 時代の経営倫理や、IoT、バイオに関わるテーマや環境、消費者対応については関心が低いまたは、アドバイザーからの研究会提案が少ない。
- ・BERC 会員は法務やコンプライアンスの方々が多いので表の関心は偏ると思うが、先般自身が担当した研究会で 4.0AI 関連の話をしてアンケートしたところ、もう一度これをやれとの声が強かった。

- ・イノベーションに対する取り残され感が強い
- ・今は SDG s に対する関心が強い。
- ・東京オリンピックに向けての対応についてプレッシャーが強くなっている。
- ・企業が生き残るために何が重要かという点を真剣に考えることが重要。
- ・経団連の企業行動指針の改訂が SDG s に基いていることもあるので対応が重要
- ・今後格付けなどの動きも注目しないといけない
- ・公益通報制度についての認証制度の検討がなされておりこの点も具体的に進もうとしている。
- ・ISO でマネジメントは進んだが、品質管理が逆になおざりになってはいないか。
- ・神戸製鋼の品質粗悪な鉄板を使用した車を購入した米国での車メーカーへの損害賠償なども注視すべき課題と考える。

4. その他

勝田部会長よりその他の確認が行われ、事務局より、西井部会員の逝去（1月20日頃）について報告がありご冥福を祈った。4月以降のテーマ募集が確認され閉会した。

以上

（文責：河口）

議事録送付先(敬称略)：

[部会員]：朝倉、荒川、安藤、石川、井上(真)、井上、岩倉、上原、遠藤(淳)、遠藤(梨)、大泉、大島、岡田(佳)、片方、勝田、加藤、河口、川村、北川、木下、熊本、栗栖、桑山、小池、西藤、斉藤、佐久間、櫻井、佐藤、柴柳、瀬名、潜道、高橋、武谷、田村、出口、徳山、中島、永井、那須、西井、西村、野瀬、野田、比賀江、樋口、肥後、菱山、平塚、古谷、古山、前原、増岡、増澤、増渕、松尾、松本、丸山、水島、水野、峰内、宮川、宮澤、山口、山中、山本、横館、吉村、銀山(オブザーバ)

[学会本部]：梅津会長、水尾副会長、高橋前会長、内田事務長